

『グローバル天理』第3号（通巻15号）掲載論文要旨

井上昭夫 巻頭言 「節から芽が出る」—竹の神秘

木でもなければ草でもない、ボーダーレスな竹は、神々の霊力と感応している。竹取物語に見られるように、古代から竹は神秘の媒体であった。天理教の教えにある「節から芽が出る」という言葉は、竹の持つイメージと繋がり、今日においてますます暗く困難になっている社会状況を生き抜く力を与えてくれる。

太田登・中井精一 「天理教原典とやまことば（15） 方言資料と比較研究：『奈良県風俗誌』〔4〕」

天理教の原典研究をすすめるうえで必要とされる方言資料から「奈良県風俗誌」26類：言語を選び、教祖が言語形成期を過ごされた天理市南部の朝和村の記載事項のなかから、隠語やことわざ、日常生活におけるあいさつなどについて報告した。

堀内みどり 「天理異文化伝道（14）天理教のコンゴ伝道〔13〕—初代会長時代〈1963—1967〉〔7〕」

日本から西義一建築技師が神殿普請の指揮のためコンゴ赴任。基礎工事、ブロック造りが始まる。ひのきしんの信者や現地の大工などと、普請を進めていった。紆余曲折があったものの、普請は着実に進み、いよいよ、柱を立てるところまで来たとき、ブラザビル市かた、突然の工事中止命令が出され、その背景には政治的な背景があることが明らかになっていった。

佐藤孝則 「生命論としてのエコロジー（2）「クローン人間計画」の光と陰〔1〕」

エコロジー思想には、生命の多様性と尊厳性がその根底にある。1996年に「クローン羊ドリー」が誕生すると、翌年にはクローニングについての研究論文が科学誌に掲載され、その後人間のクローニングの是非が新聞や雑誌で論議された。1998年以降「体細胞クローン」の牛や豚などの誕生の報告が相次ぐと、クローン動物は人類の未来に大きく貢献するという論議が多くなり、倫理的側面の論議は消えていった。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（15）二つの動き・二つの踊り」

軍隊という組織は、人間と人間の強い絆やそうした絆がもたらす充実感がもっている否定的な側面を、客観的に見つめさせてくれる格好の例と言える。教練と舞踊が生み出す人間関係や個々の人間のあり方の違いは、単なる舞台設定や社会状況の違いだけではなく、“具体的な動きのあり方”の違いによってもたらされる。わたしは、さまざまな「動き」を、ふたつのカテゴリーで捉えてみたい。ここではそれを、「筋肉の緊張志向型の動き」と「筋肉の緊張解放志向型の動き」と呼んでおくことにしよう。当然、こうしたふたつの異なる動きのあり方に対応して、「筋肉の緊張を志向する踊り」と「筋肉の緊張解放を志向する踊り」の二つが想定される。前者の動きによって織り成される営みは、閉じられた人間関係に向かって行く。それに対し後者は、開かれた人間関係に向かって行く。セラピーにせよ何にせよ、個々の具体的な場面に即して舞踊体験の内実を探って行こうとする場合、両者の違いは決定的であるだろう。

小滝 透「天理比較神秘論への試み（15）神秘主義について」

今回は、振り出しに戻って神秘主義の概要を語ってみた。また文明が神秘主義に及ぼす影響について語ってみた。次回は、それらを踏まえて、俗にスーフイズムと呼ばれているイスラーム神秘主義（タサウフ）について述べてみたい。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報（14） ケアの倫理 [4]」

「ケアの倫理」と関連する「マザリング」について、サラ・ルーディックの『母性的思考』を中心に検討する。「母性的思考」は保守的家族擁護派フェミニズムとして批判されるが、ポストモダン派はそこにおける男性・女性という二項対立の固定が問題であるという。

深川治道 「エコロジカル インタビュー（10）「エコシティ志木」

埼玉県志木市にある市民環境団体「エコシティ志木」は、部会活動を中心に広く市民に環境保全や環境学習の機会を創出し、行政とも協働して、循環型社会の実現と市民主体の街づくりを目指して活動している。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信(14)イスラム教と臓器移植[3]」

近代科学の発展から生まれてくる、命に関しての大きな問題に対してイスラム教はコーランに照らし合わせて答えを出そうとしている。イスラム教徒にとってはきわめて心強い指導ではないだろうか。

小椋 博「宗教・スポーツ・賭け（14）「脱ダム宣言」と自然の偶然（危険）性」

最近、自然の中のダムやコンクリートの建造物に対する批判が高まってきている。一つは自然保護の立場から、もう一つは公共事業を批判する立場からである。「脱ダム」路線を明確に打ち出した田中長野県知事は、その宣言の中で脱ダムの結果心配される治水のあり方が全国的に議論されることを期待する、と述べている。自然保護と脱ダムという世界的な傾向の中、自然環境の中の偶然（偶然は可能性であると共に危険性でもある）の要素と安全性の共存をどのように考えるかが問われる事態になった。

特別連載・シンポジウム「天理スポーツを語る」

金子 昭「人間学としてのスポーツ〔1〕」

スポーツも人間の営みであるから、スポーツ論は広い意味での人間学(Human Studies)の一環になる。身体文化としてスポーツを見たとき、それは近代的な競技スポーツと後近代的な生涯スポーツの二類型が挙げられる。しかし、両者はクーベルタンが示唆しているように、本来は“車の両輪”のように受け取るべきである。